

# 民族に関する一考察

佐藤 孝裕

A Thought On “Minzoku” or Ethnic Group

Takahiro Sato

The concept of “Minzoku” is very vague and confused. The main reason for that is that we call so many kinds of group of people in only one word: Minzoku. That is why a variety of Minzoku have existed in this world. “Minzoku” is not an existence based on a definition but a historical and present reality. So, many “Minzoku” have appeared and disappeared, or have been integrated and divided. We should regard “Minzoku” as such a changeful reality.

## I はじめに

1994年1月1日の朝、メキシコのチアパス州で先住民系の農民数百人が武装蜂起したとの報道に接し、正月気分が一気に醒めた。チアパス州の先住民といえば、マヤ人であることは間違いない。蜂起した場所がサン・クリストバル・デ・ラス・カサスであることから、マヤ人の中でもツェルタル人かツォツィル人であろうと推測した。サリーナス政権が進める経済政策により、先進国入りの方向に向かって歩んではいたものの、逆に貧富の差は拡大し、国内の南北問題が深刻化しつつあったことへの抗議の蜂起であろうし、それだからこそわざわざ北米自由貿易協定が発効する1月1日に決起したのであろう。

この蜂起の根底には何があるのかという問題意識から、事件の推移に関する情報をできるだけ集めるよう努めたのだが、他方、事件そのものとは別の、以前から気になっていた疑問にも改めて関心を寄せるようになった。それは、蜂起したのが、マヤ民族の中でもどのグループに属するのかと考えた時に、思い当たった疑問だ

った。そもそも民族とは一体何なのだろうか。民族呼称は、それが表わす人々の範囲を適切にカバーしているのだろうか。その呼称自体に問題はないのだろうか。

折しも冷戦の終焉後、世界各地で民族紛争が勃発し、新聞・雑誌に「民族」の文字が載らない日はないような情勢であったし、それは現在ではより深刻の度合を増しているように思われる。しかしながら、「民族」とはどういう存在なのか、「～民族」とはどういう人々の集まりなのかという問題が論じられないまま、「民族」という語が恣意的に用いられ、氾濫しているのが現状である。

本稿では、錯綜する民族概念と民族呼称の問題について、事例を示しながら、「民族」と呼ばれる概念の曖昧さについて述べてみたい。

第II章では、民族という概念の定義の可能性について考察し、民族とは何かを問うことが何を意味するかについて考えたい。第III章では、実在する民族の形成過程や現状を概観することで、民族とそれに属する成員の範囲の多様性を示し、民族には歴史的経過の中で自然に生まれたものもあれば、作られたものもあるということを明らかにしたい。更には、民族という語の

曖昧さについて論じたい。

## II 民族とは何か

民族とは何であろうか。これは古くて新しい問題である。民族は、文化と並んで文化人類学において最も重要な概念の一つであり、様々に議論されてきたにもかかわらず、文化がそうであるように、民族にもいまだに確固たる定義はない。身体形質など生物学的特徴に基づく区分である人種とは異なるし、言語に基づく区分である語族とも本来異なる。

たとえば、『文化人類学事典』を見ると、「特定の個別文化およびそれへの帰属意識を共有する、人類の下位集団」「個別文化のうちでは、言語、信仰、習俗、心理的特徴、領域などのすべて、あるいはそのいずれかが必須であるとの議論がなされてきたが、いずれの説も多彩なる実在の民族に照らして見るならば不十分であるのに対し、帰属意識（アイデンティティ）のみは常に認めることができる」<sup>1)</sup>とあり、民族を規定する上での曖昧さから来る混乱を認めると共に、民族が成立する上でのキーポイントとして帰属意識を挙げている。だとすると、民族というのは客観的な基準に基づく存在ではなく、それに属する成員の意識に基づく主観的な存在であるということになる。

問題を更に複雑にするのが、部族という語の存在である。民族と部族とは、どういう関係にあるのであろうか。先ほど引用した『文化人類学事典』には、「共通の言語や慣習を有し、ある範囲の地域に住む人々の集まりを指す」<sup>2)</sup>とある。これでは民族の定義と大差ないことになってしまう。事実、部族という語は、しばしば二つの意味で民族の下位概念として用いられてきた。

一つは、民族は「文明」社会に住む人々に対して用いられ、部族は「未開」社会に住む人々を呼ぶ際に用いられた、ということである。現

在でも、アフリカの人々を部族的存在とみなして「～族」と呼ぶことは新聞やテレビでも一般的だが、ヨーロッパの人々を部族扱いする人はいないであろう。たとえばルワンダ内戦に関与している人々は新聞紙上でも「ツチ族」「フツ族」と呼ばれるが、「ドイツ人」を「ドイツ民族」と呼ぶことはあっても、決して「ドイツ族」と呼んだりはない。「文明」と「未開」の対比は、「文明人」が勝手に作り上げた自らの物差しによる一方的な判断に基づくのに過ぎず、現代文明の基礎を築いたヨーロッパ的な発想である。従って、この意味での民族と部族の区別は決して容認できるものではない。

もう一つは、民族は大人数を有する人間集団に対して用いられ、部族は少人数の集団に対して用いられた、ということである。この考えに従うと、1億2000万以上の人口を有する日本人は民族でありえても、わずか8人しかいないブラジルのアマゾナス州のジュマは部族だということになる。確かに1億2000万人と8人では、差が明瞭ではある。しかし、どのくらいの人口が民族と部族の境になるのかということになると、ことは容易ではないし、結局は相対的で曖昧な区分でしかない。このように、数に基づく区分も成り立たない。ただ、川田のように、研究者の立場からは、部族を地方的小集団、民族をそういう小集団の独立性が壊された後により広い範囲での共通性が意識された集団として区別することに有効性がある、と主張する研究者もいる<sup>3)</sup>。

ともあれ、こうして見ると、民族と部族の区別は、「文明人」の差別意識によって恣意的になされてきたことがわかる。このような旧弊を排するためにも、現在の日本の人類学では、部族の語を用いず民族に統一し、更には「～族」「～民族」と呼ぶ代わりに、「～人」という表現を使うようになっている<sup>4)</sup>。

さて、民族という語と部族という語を民族に一本化することにしても、民族とは何であるか

注1 日野のように、部族という語がアフリカでは有効だと考える研究者もいる。日野舜也「都市とエスニシティー—アフリカ都市における事例」『文化人類学』2 都市とエスニシティー アカデミア出版会、PP.93-107, 1985; 同「部族本位制社会から国民社会へ—文化接触とアイデンティティの考察—」『民族とは何か』岩波書店、PP.281-301, 1988。

という問題に根本的に答えたことにはならない。民族という人間集団の範疇はどのようなもので、どのようにして生じるのであろうか。

民族について考えるには、二通りの対照的な方法がある。一つは、まず民族を分類する上での基準を定めておいて、実在の民族がそれにどう当てはまるかを検証するやり方である。もう一つは、それとは逆に、実在する民族がどういう経過で民族と呼ばれる存在になったかを追究し、それを基に民族を成り立たしめる要素は何かを抽出しようというやり方である。

前者の例として、「言語が共通で人間生活にとって不可欠なすべての分野にわたる生活様式すなわち文化が共通・同質的で共同の祖先からの出自を信じ、内婚的で、経済的には独立の単位体であり、元来は同じ居住地域に住み、同一の集団に帰属するという意識と感情とを持つ人びとの集団」<sup>④</sup>という有名な民族の定義がある。殊に、言語を民族を区分する上での重要なメルクマールと考える人は少なくない。また、宗教や歴史もしばしば重要な指標と考えられている。要するに、これら客観的諸条件と、その集団への帰属意識を持っているかどうかという主観的条件が、民族を成立させる根本的な規定である、というのである。しかも、この両者は対立するものではない。何らかの客観的条件を共有しているという事実がなければ、帰属意識も生じないだろうからである。

現在、民族を成り立たせる大本は、帰属意識にあると考える研究者は多い。筆者もその一人である。ただ、その場合も、何故にその帰属意識が生じたのかを考える必要がある。帰属意識の根底には、何らかの客観的条件が存在するはずだからである。

さて、どちらの方法をとるにしても、もう一つその前にはっきりしておかなければならないことがある。それは、我々が民族という語を共通の認識で使っていないということが、民族とは何かという問題を複雑なものにしている大きな原因の一つになっているということである。実際、民族は様々な観点から二分できる。たとえば、他者から規定された民族と、自らが自称

する民族という区分である。前者は、外部社会がある人々の集団を一民族だとみなし、彼らに対して民族呼称をつけたものである。その例としては、たとえばホツtentottが挙げられる。ホツtentottというのは白人の植民者であるアフリカーナーがつけた蔑称で、「吃る人々」という意味のようである<sup>⑤</sup>。彼ら自身は、自分達のことを「人間」を意味するコイと呼んでいる。また、後者はある人間集団が自分達が一民族であることを外部社会に対して示し、自ら名を名乗ったものである。その例としては、アイヌがある。アイヌとは「人」を意味する語であるが、もともと、少なくとも鎌倉初頭にはもっぱらエゾと呼ばれていたようである。それがアイヌに変わった理由について、金田一京助は、エゾに侮蔑感が伴うようになったため、もと敬意をもったアイヌが美称として用いられ、それが一般化して単に人を意味するようになったと推測している<sup>⑥</sup>。

この両者の間にはしばしばずれがあり、それが民族とは何かという問題をますます厄介なものにしている。しかしながら、自称であれ他称であれ、当該民族が実在するという点では共通している。

この実在性を観点にして、実在する民族と厳密な定義に基づく概念上の民族という二分もできる。この場合、後者は文字どおり概念上の存在であり、現実に存在する民族との間にはずれがあることになる。このような概念上の民族をいくつ作り出したところで、実在する民族をそれに基づいてグルーピングし直すことができない以上、更に新たな人間集団の類型を生み出すだけであり、問題の解決につながるどころか、ますます遠ざかるばかりである。

このように考えると、我々が民族とは何かを考える際に取り扱わねばならないのは、様々な歴史的経過を経て現実に存在する人々の集団であるということになる。つまり、民族とは何かと問うことは、普遍的な定義を定めてそれに則って実在する人間集団を分類するのではなく、逆に、我々が今現在民族と呼ぶ人間集団は、どういう人々から成り立っているのかを分析する

ことにほかならない。さもなければ、定義上の民族と実在の民族には多々ずれがあるために、民族は存在しないことになりかねないし、「実体としての民族は存在しない。あるのは民族が語られ、それに関する行為が行われている状況、言わば民族論的状況だけである」<sup>⑦</sup>という結論に陥ってしまうことになる。

こういう考えに立って民族を理解しようとすることは、現状を追認するだけで、結局民族とは何かという問いに答えていないという反論もあるかもしれないし、それにも確かに一理ある。しかしながら、民族は本来何らかの基準を基に生まれたのではなく、長い歴史の過程で生まれた人間集団に対して、あるいは当該集団自身が、またあるいは外部の人が恣意的に命名して現在に至っている存在なのであるから、ある定義に基づいた概念上の民族を論じることは無意味である。相手にすべきは民族の理想型ではなく、地球上にかつて存在し、また現在存在する実在の民族なのである。

これら実在の民族は、どのようにして形成されたのだろうか。そして、諸民族を成り立たしめている要素に、何らかの共通性がないだろうか。

### III 民族の成立条件

本章では、現在民族として認められている集団について、その形成過程と現状を見ることによって、何が民族を成り立たせる要素になっており、それには何らかの共通する点がないか考察してみたい。具体的には、大集団であるアラブやトルコから極小集団であるジュマまで、様々な規模の民族を取り上げる。

#### (1) アラブ<sup>⑧</sup>

アラブという言葉が歴史上で初めて使われたのは、紀元前853年のアッシリアの碑文においてであり、アラビア半島北部の遊牧民のことを指していたようである。アラブ人自身がアラブを自称として使い始めたのは、北アラビアでは紀元前4世紀頃、南アラビアでは紀元前後で、いずれにしてもやはり遊牧民を指していたらしい。

アラブの意味が変わるのは、モハメットの死後、イスラム教を奉じての征服活動の最中であり、この時アラブはペルシア人・シリア人・エジプト人などの被征服者に対する言葉で、征服者、支配者という意味で使われるようになる。ところが、10世紀に入ってセルジューク・トルコの支配下に入ると、再びアラブは遊牧民を指す言葉に戻る。このように、「アラブ」という言葉は、歴史的に見ると遊牧民と結び付きが深かった。

しかし、現在アラブという時、アラビア語を中核としたウルーバ（アラブ的価値、アラブ的なもの）を持っているということを示すようである。このウルーバは、歴史的な生活様式、イスラム的生活様式、離合集散型集団様式という三つの要素から成っており、この価値観を持った人がアラブだと考えられている。

#### (2) トルコ<sup>⑨</sup>

現在トルコ人を自称する人々は、トルコ共和国だけでなく、中央アジアから東ヨーロッパに及ぶ広い地域に居住しており、トルコ共和国以外のトルコ人の多くが、オスマン・トルコ以来の住民の子孫である。彼らがトルコ人という帰属意識を持つ根拠には、かつて10世紀以後征服活動を行った偉大な祖先達を誇りに思うきわめて主観的な意識と、トルコ諸語を話すという客観的事実がある。殊に広義のトルコ語を話すということが、トルコ人のアイデンティティの形成に大きな役割を果たしている。

#### (3) ベルベル<sup>⑩</sup>

ベルベル人は、紀元前8000～2000年にかけて北アフリカで栄えたカプサ文化の担い手の子孫であり、現在北西アフリカの10ヵ国以上に居住し、ベルベル語を母語とする先住民である。ベルベルはラテン語のバルバルスに由来するといわれる他称で、彼ら自身は「高貴な出の人間」とか「自由人」を意味するイマジゲンと自称している。紀元前1200年頃のフェニキア人以来、多くの異民族の侵略にさらされてきたが、現在でも山岳地帯や砂漠など、人の近づきにくい比較的孤立した地域に居住していることもあって、言語を始め古くからの社会・文化的特徴を保持している。

## (4)マヤ

紀元前2000年紀から、メキシコ東南部、グアテマラ、ホンデュラス西部に居住している民族であり、かつては古典期（250～900年頃）を中心として高度な文明を誇っていた。現在でも若干縮小してはいるが、かつてとほぼ同じ地域に居住している。現在のマヤ人は、人口は約250万で、使用する言語によって30弱のグループに分けられる。国による近代化の推進や商業主義の浸透により、伝統的文化は失われつつある。また、都市に出かける者も多くなり、焼畑でトウモロコシを中心とする農業を行うような伝統的な生活をするマヤ人は減少しつつある。

現代でも比較的昔ながらの伝統を維持しているのは、チアパス高地やグアテマラ高地に住むマヤ人であるが、グアテマラ高地マヤ最大の集団であるキチェー人出身のノーベル平和賞受賞者リゴベルタ・メンチュは、大事なものは何かと質問された時、スペイン語だと答えている<sup>12)</sup>。外部に自分たちの意見を訴えるためには、自分たちの固有の言語ではなく、自分たちを抑圧するもとなった人々の言語を使わざるを得ないというのは皮肉である。

伝統的文化を捨てようとする考えは、特に若者に目立つ。その背景には、彼らの絶対的貧困がある。彼らにとって、苦しい経済的状況から抜け出す唯一の道は、スペイン語を覚え、洋服を着て、都会に出て成功することだけなのである。こういう現実が、マヤの固有の文化の消滅に拍車をかけている。

いずれにしても、我々がマヤ人を想起する時、過去の文明を築き上げた人々の子孫であり、現在マヤ語を話す人達の集団を考えがちだが、過酷な現実に押し潰されそうになっている彼らに祖先の栄光を誇りに思う余裕は窺えないし、また特に若者の中には、先述した理由からマヤ語を話せない者が増加しつつある。それに加えて、彼らの間に、マヤという大きな民族の成員であるという意識があるかどうかも疑問である。たとえば、サパティスタ蜂起が起こったチアパス州を例にとって見ても、アルトスと呼ばれる2500メートルを超える山岳地帯の先住民社会

は、村落ごとの独立性が高く、ツォツィル人やツェルタル人といったマヤ語系の集団ごとにはまとまっていない<sup>13)</sup>。従って、彼らに帰属意識があるとしても、それはせいぜいツォツィルやツェルタルといったレヴェルまでで、マヤまではいきつかないであろう。

こうなると、マヤ人という民族のまとまりは、彼ら自身のアイデンティティに基づくものというよりも、外から見た研究者によって作られたものと言った方がいいように思われる。そして、その際にマヤ人として認定する大まかな基準が、先述したように、過去の文明を築いた人々の末裔であり、マヤ語を使用する人達ということになるだろう。

(5)ジュマ<sup>14)</sup>

トゥピ語系の小集団で、もともと住んでいた海岸部やアマゾン本流部から奥地に逃げ込み、現在住むブラジルのアマゾナス州に移動して来たと考えられている。国立インディオ局から民族としての認定を受けてはいるが、1986年当時、人口はわずか8人に過ぎない。植民地期以降逃亡を続ける中で、徐々に小集団に分裂して生き残ったグループの一つであろう。トゥピ語系の民族は、かつてはほとんどブラジル全域に分布していたが、今世紀に入って数多くのグループが消滅しており、ジュマも同じ運命をたどる可能性がある。

## (6)インディヘナ（インディオ、インディアン）

南北アメリカ大陸に住む先住民は、紀元前1万年以上前にベーリンジアを越えてユーラシア大陸から渡って来たモンゴロイドの子孫である。彼らは、15世紀末に新大陸に到達したヨーロッパ人がインディアス（インダス川以東のアジア）に着いたものと誤解したため、インディアスに住む住民ということでスペイン語でインディオ、英語でインディアンと呼ばれるようになってしまった。

英語圏の北米に住む先住民をインディアン、スペイン・ポルトガル語圏の中南米に住む先住民をインディオと呼び慣わしてきたが、近年、先住民自身がこの名称を嫌い、別の名称を用いるようになってきている。と言うのも、「インデ

イオ」という語には「野蛮人」「礼儀知らず」といった悪い意味が付与されるようになったからである<sup>④</sup>。メキシコでは、相手が実際に先住民であろうとなかろうと関係なく、他人を罵るときにも用いられる。また語としての用例を見ても、engañar a 人 como a un indio が「容易に人をだます」、hacer el indio が「ばかなことをする」というように、侮蔑的な意味がこめられていることがわかる。そこで、このような含意のある語を避けるために、「インディオ」の代わりに「インディヘナ（原住民）」や「カンペシーノ（田舎の人）」という名称が使われるようになってきている。

最近の民族をめぐる論議にインディヘナが加えられることがあるので、ここでも取り扱ったのだが、彼らをどのような名称で呼ぶにしても、いくつかの点で、彼らを一つの民族として捉えるのは無理があるように思われる。一つには、彼らの居住範囲の広さがある。南北両アメリカ大陸全域に住み、多様な文化を有する彼らをひとまとめにすることが可能であろうか。たとえば、マヤ人とジュマ人をひとまとめにして扱うことができるだろうか。事実上、彼ら全てに共通する点といえば、先祖がかつてベーリンジアを越えて渡って来たということだけなのである。また、彼ら自身の意識の問題として、自分達が同じ集団に属する成員だと考えているとは思えない。

最後に、特殊な民族として、二つの事例を挙げておきたい。一つは政治的民族とでも言うべき存在であり、もう一つは個人的利害関係からある民族に「なる」事例である。前者は、ある人間集団が、居住する国の政策によって強制的にある民族名を名乗らされたものであり、後者はその民族に属しているということが彼らにとって都合がいいという理由から、本来何のかかわりもない民族に属していると称することである。

前者の例として、中国の少数民族が挙げられる。中国にいるこれら56の少数民族は、1950年代の「民族識別工作」によって政策的に作り出されたものであり、各民族の自称ができるだけ

尊重されたとは言え、彼ら自身の民族的感情や帰属意識とは必ずしも一致していない場合もあるのである<sup>⑤</sup>。後者の例としては、やはり中国と旧ソ連で実施されていた民族帰属の自己申告制が挙げられる<sup>⑥</sup>。たとえば中国の場合、少数民族への優遇策がとられているため、自らをその成員として申告する人が多く、結果的に少数民族の数が増加している。また、ブラジルでは先住民が未成年者と同様の扱いを受けるため、たとえば殺人を犯した者が罪の軽減を狙って、先住民だと主張し、認められると先住民になる場合もある<sup>⑦</sup>。

以上の例からわかるように、民族は、少なくとも3種類に分類できる。それは、(1)歴史的過程の中で生まれ、各成員が帰属意識を持った民族、(2)歴史的には存在したものの、現在ではその範疇が不明確になり、研究者等外部からの認定によって存在する民族、そして(3)根拠は乏しいか、あるいは全くない、恣意的に作られた民族である。

(3)の場合は、言わば虚構あるいは虚偽の民族であり、学問的対象にはなりにくい。従って、考察の対象からははずし、ここでは(1)(2)のカテゴリーの民族についてのみ考察する。

民族を成り立たせる条件として、何らかの文化的特徴の共有と、帰属意識という二点が、特に重要だと思われる。文化的特徴の中でも、言語が重要な位置を占めることも明らかである。アラブ、トルコ、ベルベルのいずれの場合も、それぞれ、アラビア語、トルコ語、ベルベル語を話すということが、民族意識の中核にあった。また、マヤ人にしても、歴史的にメソアメリカの他の諸民族と多くの文化的特徴を共有してきており、マヤ人と他の諸民族を分ける最大の基準は言語に求められることになる。

ただ、だからといって、言語を重要視し過ぎるのも危険である。仮にマヤ人がマヤ語を話さなくなったにしても、彼らがマヤ人固有の価値観を保持し続け、かつ自分たちがマヤ人だと意識しているのであれば、彼らはマヤ人だと言えるのではないだろうか。要するに、確かに言語は重要な文化的特徴の一つだが、一つに過ぎない

いということである。アラブの場合のように、宗教が言語に劣らぬ重要性を持つことも少なくない。そして、そのようなある文化的特徴を共有しているところから、自分がある民族に属しているという帰属意識が生まれるのであろう。

人間は、生まれた時にはただの「ヒト」という動物に過ぎない。生まれ落ちた環境にある文化を吸収することによって、初めて人間になるのである。つまり、人間というのはすぐれて文化的存在なのである。ある意味では、人間は、生まれた時にはどの民族にも属していないと言える。成長する過程で、生まれた所の文化を身につけることで、その文化を持つ民族の一員になるのである。その意味で、民族に生まれるのではなく、民族になるのである。

もう一つ、民族を考える上で重要なのは、民族はもともと存在していたものではなく、歴史的過程の中で、他者との関係において生まれたものだ、ということである。世界に自分達しかない信じ、他者を知らない人々に、「われわれ」意識はないであろうし、従って、自分達を呼ぶ名もないであろう。他者を知って初めて「われわれ」意識が生じ、自他を区別する必要から民族名が生まれるのである。こうして生まれた自称の民族名は、単に人間を意味することが多い。他に例を探すまでもなく、日本のアイヌがその好例である。このように、自民族中心主義的発想は世界中どこでも見られるようである。

この「われわれ」意識は、普遍的なものではない。時間の推移と共に、「われわれ」意識を持つ集団の間に、分裂や統合が生じるであろう。このように、民族は固定したのではなく、絶えず流動する可能性を秘めている。実際、現在言うところの民族は、古いものではなく、近代の産物である。そして近代の民族は、しばしばナショナリズムと密接に結び付いている。端的に言えば、ナショナリズムの信奉者が現代の民族を作り出し、そして彼らは国家を持つことで国民になるのである<sup>28</sup>。彼らにとって、民族とは国民として国家を持てるだけの人間のまとまりを意味するのである。国家を持つためには、国民と共に、土地が不可欠である。ここに領土問

題が生じ、民族紛争が紛糾・長期化する。スリランカでは、独立後にシンハラ語を唯一の公用語とするシンハラ民族主義政策がとられることで、それに対抗するためにタミール民族主義も生まれた<sup>29</sup>。また、ユダヤ人によるイスラエルの建国が、パレスチナ人の民族意識を目覚めさせた。

このように、民族というのは、一様に説明できるものではない。様々な経緯によって生まれた人々の集団を、全て民族の名で呼び慣わしているからである。従って、我々がある民族について考える時、その民族がどういう人間集団であるかは、個別に判断するしかない。民族という語に、その人間集団を定義づけるような普遍的な意味がないからである。

#### IV おわりに

民族をどう捉えるかについて、総合研究開発機構が出版した『民族に関する基礎研究』では、次の六つの合意事項が記されている<sup>30</sup>。

- ①民族とは「我々意識」を有する集団である。
- ②民族とは主観的な集団である。
- ③民族とはみずから名のり、他者から名づけられることによって形成される集団である。
- ④民族とは重層構造をなしているさまざまな規模の集団である。
- ⑤民族とは生成、分裂、消滅するダイナミックな集団である。
- ⑥民族とは国家との緊張関係のなかでうごめく集団である。

これに対して、異を唱えることができる人はほとんどいないであろう。というのも、上記の合意事項は、現在民族として認められている人間集団の特徴を、総花的に述べているからである。

しかしながら、これは民族を説明はしていても、民族とは何であるかという問いに答えたものにはなっていない。このこと自体が、民族とは何かを端的に物語っているように思われてならない。つまり、民族とは、何よりも、まず存在するものなのである。概念ではなく、実体な

のである。従って、定義づけにはなじまないの  
である。

これまでがそうであったように、これからも  
民族は変遷を重ねるであろう。いくつもの民族  
が生まれ、消えていくであろう。このように、  
民族とは、時間軸の中で捉えるべき存在なので  
ある。今という時には、今の民族が存在してい  
る。しかし、このことは、その民族がかつて存  
在したことを意味しなければ、未来も存在する  
であろうことも意味しない。ただ言えるのは、  
その民族が、かつての、あるいは未来の民族と、  
つながりを持っているということである。民族  
とは、時の流れの中にたゆたう人間の集団なの  
である。

#### 引用文献

- ①井上紘一「民族」、『文化人類学事典』、弘文堂、  
p.749-51, 1987。
- ②村武精一「部族」、『文化人類学事典』、弘文堂、  
P.650, 1987。
- ③綾部恒雄・川田順造・二宮宏之・宮治美江子「エ  
スニシティ研究の現在」、『文化人類学 2 民族と  
エスニシティ』、アカデミア出版会、P.110, 1985。
- ④綾部恒雄「東南アジアの民族論－国民国家とエス  
ニシティの力学－」、『民族とは何か』、岩波書店、  
P.217, 1988。
- ⑤山内昌之『民族の時代 混沌と共生の二十一世  
紀』、PIIP 研究所、P.49, 1994。
- ⑥国分直一「民族の形成と展開」、『民族の世界史 1  
日本民族と日本文化』、山川出版社、PP.176-7,  
1989。
- ⑦名和克郎「民族論の発展のために－民族の記述と

- 分析に関する理論的考察－』、『民族学研究』、57-3,  
P.306, 1992。
- ⑧片倉もとこ「アラブとは何か」、『文化人類学 2  
民族とエスニシティ』、アカデミア出版会、PP.203  
-17, 1985。
- ⑨小松久男「言語・民族・歴史：汎トルコ主義から  
の眺望」、『民族に関する基礎研究－国家と民族－』、  
総合研究開発機構、PP.47-68, 1993。
- ⑩宮治美江子「タフスト・イマジゲン（ベルベルの  
春）？－アルジェリアのベルベル人問題」、『文化人  
類学 2 民族とエスニシティ』、アカデミア出版  
会、PP.166-80, 1985。
- ⑪木村秀雄「インディヘナと揺れる綱」、『いま、なぜ  
民族か』、東京大学出版会、P.132, 1994。
- ⑫落合一泰「よみがえる革命児サパタ メキシコ現  
政権の新自由主義とサパティスタ蜂起」、『思想』、  
10月号, 1994。
- ⑬木村、上掲書、P.124。
- ⑭木村、同上、P.120。
- ⑮村田雄二郎「中華ナショナリズムと最後の帝国」  
『いま、なぜ民族か』東京大学出版会、PP.45-6,  
1994、竹村卓二「少数民族の歴史と文化」、『民族の  
世界史 3 漢民族と中国社会』、山川出版社、  
P.333, 1983。
- ⑯井上紘一・内堀基光・川田順造・黒田悦子・松原  
正毅「民族学からみた民族」、『民族の世界史 1  
民族とは何か』、山川出版社、P.212, 1991。
- ⑰井上・内堀・川田・黒田・松原、上掲書、P.213。
- ⑱山影進「国家と民族」、『民族に関する基礎研究－国  
家と民族－』、総合研究開発機構、P.79, 1993。
- ⑲西島建男「民族問題とは何か」、朝日新聞社、PP.  
6-7, 1992。
- ⑳北村俊幸「民族に関する基礎研究について」、『民族  
に関する基礎研究－国家と民族－』PP.19-20,  
1993。